

能「高砂」礼讃

成城大学教授 大谷節子

能はシンプルなものである、と説明されることが少なくない。しかし、能は実に複雑な仕掛けと遊びに満ちている。あらゆる芸術に同じく、能を堪能するのに「知識」は必ずしも必要ではないが、能の作者の何人かが潜ませた仕掛けと遊びは、解説されることを待っている。

こうした作為の作者の一人である世阿弥は、能が舞台で生み出す感動を「妙」「花」「面白」という三つの語で表している。感動の正体を言語で表現するならば「妙」（極めて逆接的な言い回しであるが、言語を絶することを意味する語、具象で表現するならば「花」、感覚で表現するならば「面白」というのである。そして世阿弥は、この「妙」「花」「面白」を現出させるために、能を書く技術を「種」「作」「書」の三つの観点から論じている。「種」は素材、「作」は構成、「書」は文体である。

能の基本の「き」が、番組の最初に演じられる「脇の能」であるが、「脇」は二番目の意味を持つ。初番の能を「二番目」を意味する名で呼ぶ理由は、演能の前に「翁」があることを前提とする意識である。「翁」を演じることが常でなくなった時代（それは世阿弥の時代に既にそうであったが）、初番に演じられる「脇の能」は、

祝^{しよとげ}禱^{たげ}芸である「翁」の持つ祝言性を受け継いでいる。その代表作が「高砂」である。

前場の舞台は播州高砂の浦。上洛の途上に高砂の浦に立ち寄った阿蘇の神主友成（ワキ）の前に、老夫婦（前シテ・ツレ）が現れる。老夫婦は、古木の松の久しさと、自らの長寿を重ね詠しながら、松の葉を掻き集めている。

友成は老夫婦に尋ねる。「古今和歌集」仮名序に「高砂住の江の松も相生のやうに覚え」とあるが、「高砂」と「住吉」は遠く離れているのに、なぜその松が「相生」であるのか。すると老夫婦は、播州高砂に住む姥と摂州住吉に住む尉が互いに心を通わせているのと同じ事だ、と答える。返答の面白さに心惹かれた友成がさらに詳しい由来を尋ねると、「高砂」とは万葉集が編まれた「^{まほし}五匹き世のこと、「住吉」とは「今」の延喜の治世を指し、「相生」の「松」とは、和歌の道が古今変わらず栄々であることの喩えである、と説き明かす。そして万物が発する声は心を種として表れた和歌の姿であること、中でも松は、心を種として繁る言の「葉」が尽きぬ長久の喩えであることを示し、自らを住吉の神、姥は高砂の神であるこ

とを明かした後、住吉での神体出現を約束して姿を消す。

後場は、友成一行を乗せた船が、住吉に到着するところから始まる。出端でばの囃子で現れた神姿の後シテ(住吉の神)は、中世古今集注釈の世界で古今集編纂の契機として語られる深秘の贈答歌

我看见も久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代いくよ経ぬらん

むつまじと君は白波瑞籬みづがきの久しき世よりいはひそめてき

に抱つた謡を詠じ、神遊びの様を見せて治世と歌舞の繁栄を寿ぐ。

江戸時代出版された全ての謡本において、第一冊目の第一曲目が「高砂」であるのは、「脇の能(初番の能)」というだけでなく、その需要が最も高かったことを反映している。この国で、最も多くの場面において、最も多くの人々によってウタわられてきた詞は、「高砂」の謡であろう。人生の通過儀礼、社会儀礼の場にこの曲は不可欠であり、その需要の最たる場が婚礼であった。

婿取り、嫁取りの謡は、第一の祝言なり。高砂の謡を本とせり。
(『八帖本花伝書』)

「高砂」の謡がこのように婚礼の祝言謡の代表曲となったのは室町後期にまで遡るが、熊手や杉箒を持った尉と姥(流儀)によっては尉も杉箒を持つが松の葉を掻き集める、いわゆる「尉と姥」の図像は、江戸時代から近代に至るまで婚儀のシンボルとしての機能を担い、近世から近代にかけての婚礼の座敷には、この尉と姥が

松の下に並び立つ、高砂島台と呼ばれる祝儀飾りが置かれていた。

かつて高砂島台は、扇と並ぶ婚礼祝いの品の代表的なものであり、大店の婚礼祝儀には数個の島台が到来することもあったという(森田登代子「近世商家の儀礼と贈答——京都岡田家の不祝儀・祝儀文書の検討——」岩田書院、二〇〇一年)。現在も結納の品として用いられる一刀彫の高砂人形は、この高砂島台に由来する。

「誰さんは、こんど高砂らしいよ」という会話こそ聞かなくなつたが、結婚式場の新郎新婦の席が「高砂」と呼ばれたり、結婚式が行われる大広間に「高砂」の名が付けられていたり、式場の建物自体に「高砂」の名が冠されているのも、「高砂」が婚儀の代名詞であり続けていることの証しと言える。

めでたさの表象として不動の地位を誇る「高砂」であるが、世阿弥が名付けた本来の作品名は、応永三十年(一四二三)の伝書『三道』に「大よそ、三体の能懸さんたいが、近来押し出だして見えつる世上の風体の数々」としてある二十七曲中の一つ「相生」である。この古名に象徴されるように、古今集仮名序の一節「高砂住の江の松も相生のやうに覚え」をめぐる中世の解釈がこの作品の根幹を作っている。

この仮名序の一節は、松を詠み込んだ例歌を挙げて和歌表現の多様性を述べた部分であったが、省略が多く難解であり、中世の古今集注釈の世界では、「相生のやうに」という譬喩が果たして何を意味するのか、「高砂」「住の江」の「松」とはそれぞれ何を指しているのか、その解き明かしが深められていった。その最も流布

した解釈が、「高砂」を万葉集の寓意、「住吉」を古今集の寓意と説き、二ヶ所の「松」が「相生」である様を、二つの和歌集が編纂された時代の和歌の繁栄の表象とする解釈であった。

能「高砂」はこの解釈に基づき、古今集の表象としてシテを住吉に住む尉(住吉神)とし、万葉集の表象としてツレを高砂に住む姥(高砂神)に造型し、二つの和歌集が編纂された時代の繁栄を並び讀めるために、二神(上掛り系諸本は「松の精」と改変を夫婦として設定している。世阿弥は、シテとツレの造型に古今集仮名序の「相生」をめぐる秘事を図像化、具象化し、作品名を「相生」としたのであった。

前場の見どころの一つは、「クセ」の半ば過ぎ、シテが熊手で松の葉を掻き集める場面であるが、これは古今集編纂事業を具象化した重要な場面でもある。

掻けども落葉の尽きせぬはまことなり 松の葉の散り失せず
して色はなほ まさきの葛永き世の たとへなりける常磐木の

この文章は、古今集仮名序の末尾「松の葉の散り失せずしてまさきの葛永く伝はり」に基づいているが、ここは仮名序の冒頭に記された

和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける

心を種として繁る「言の葉」が和歌であるという主張を基に、散り絶えることがない松の葉を、詠み続けられる和歌の比喩として寿ぐものである。

前場の尉が松の葉を掻き集めるこの所作は、詠み継がれる和歌の永遠性、勅撰集編纂の無窮性、これに象徴される永久なる治世を表しているのである。この所作には「久」の文字を書くという口伝があるが、奇しくもこの場面の本意を伝えている。

さらに後シテ登場の場面で、「伊勢物語」百十七段に書かれている住吉社頭での「神」と「君」との贈答歌に基づいた謡が謡われるが、これは中世の古今集注釈、伊勢物語注釈において、和歌の神である住吉神が同一体である業平に和歌の秘伝を伝える場面として説かれるものであり、古今集編纂の契機となった深秘の場面を再現する役割を果たしている。

このようにして、能「高砂」の仕掛けを解いていくと、人々の心を種として詠み続けられる和歌を掬い集める和歌集編纂を讀えることが、治まる世を寿ぐ祝言、つまりは「脇の能」の表現になっていることが見えてくる。

世阿弥は、中世の古今集注釈書における高砂・住吉を万葉と古今の聖代に宛てた「相生」の解釈を基に、夫婦という最小単位の共同体を「相生」の姿として示し、さらに仮名序の「相生」に「相老」をも掛けて、「共に生き共に老いる」という意味を込め、仲睦まじく齢を重ねた夫婦という具体相を添えた。かくして能「高砂」は長きに亘って謡い継がれ、最も親しまれる作品の一つとなったのである。